大和物語 下

岡田眞之藏書

[illegible]

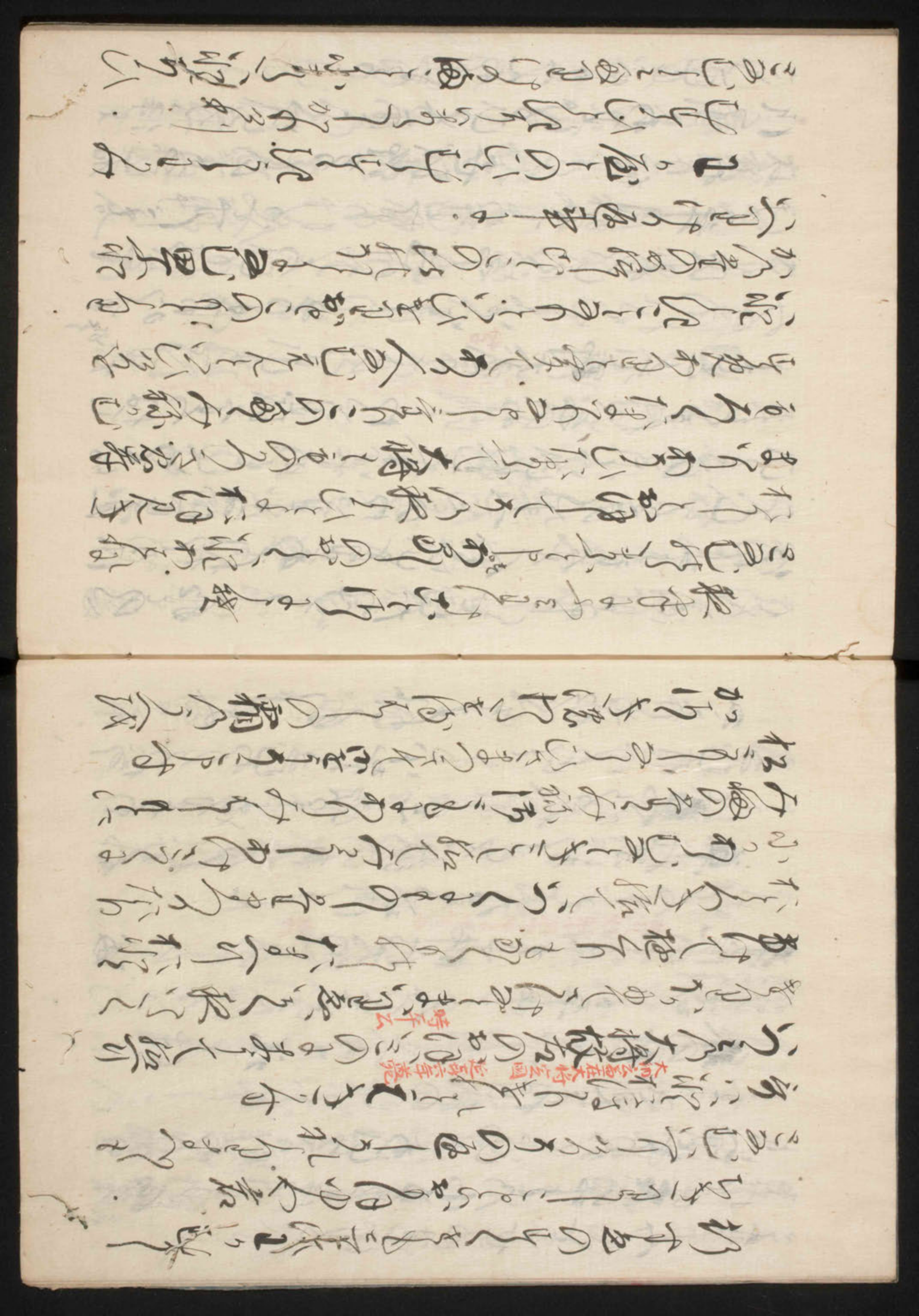
[illegible]

[illegible]

こらくのこゝろもきこえまゐらせ
うこゝろざしをはこびまゐらせ
と梅津殿のたまはせうけたまはり
ますに法師はゐむ有りそれこのうこゝ
ろ梅てしら月たゝふ梅てあひまゐらせ
このよつの称をもてぬくんたのもとに
つゝそのゝ梅いとしこゝろをかんたゝ
うれまそうきのもとに
あひんていまうの梅こゝへみるもせな
ろくもれいおもしたまへ
五しこうこ
いかに迷もかつく物をたの梅ら集

みたもおくそれいかにも
こゝも有けりもいかにおもひ給ふ
そうにたゝ三ゝ次ゝまるあ
草はにかゝ迷ろ藤の舟なれも
ゝゝゝゝよなうへかたゝ
中院の小方へまゝ殿は大納言のもとに海
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
春の野はみてきゝえはか
ゝさんさねとなの梅ゝ称はら
といへはきかいしてあひちゝにあるる
そはゝ地方の中へ小田あてはゝ
こゝ見よみてとこせゝ梅はゝ

右傍棟梁女祝中納言敦忠母



さきこしたのはんのきのこと
はくらはあるけひしきのこと
らーわりなくて老ぜ絶えるものはあるこ有
けるを年月かくてあるまはかりけのとすべきもの
さこひはあひしく思もつけうるこひはくも
みるこうしくてくいどいうう君はあかるまは
もこして野大武うてのつこひはくまた
まくうれっ思のわりーわるまはそうねし
ひうさのこといひけむしんはいてあるむいてい
むしらんこのまへこのわるまはあるむまは
作りまをなりんもいむをまあしかうは
くきはいるるにをむたひてーあとのく

きひをはかりかーらもうきとーのかくあ
るむまへりまはやーなれ思はかけの
わるへりてらしるむいうさのこいひをまは
しうわるれるはあるしすれとらうく
こしかくるむいりをれ
むしたはのまりくるーはーあ河ん
りいくむまてなるまはあるあ
ミうんあまれおるれてきたなのけのあ
この口ろく孫ぬこるむあけのかん人
大武のそらあるく秋の紅葉とはもきれく
麻のはいてもくるまへれるはそ
あるいうくにしんみ

好古

自河肥後國自河曾山あ川也あ名白高以彩

このひとさのこゝろをみむとて
ものゝまねをしてよんでたる
させむとてかくいふなるを
わのとにたゝみの中にそたゝるさとをつ
とすゑとつけさすりに
妹の山をやうこよりはしめ
こうつけあるはな
はるゝ女房よりなこと
人をまつやとにいてゝ
ちさとの月のうち
はたんいあるを
えをつけてまつ

秋の夜のこゝろやつゝ
あはせらるゝとまた
天帝のはしめ卯月のつゝをはつ日うゑ
すれねとよませ給ふ
云々
かさはいとゝもみのあ
とをむしみをはしこ
みのはしの行恒とをして月八
なりるを秋のあはれ
をとあり毎月をを
をとしてはいふなるを
とはなせたまふなれ
ひてはうまれ

てる月を袖のうちにいれて袖とは
山のとりていまはなほそのう
くよりはらはれるこころをみ
ゝ雲のたちかくれぬるとまたは
わまをせうかさをきつゝ
新しみて月のかたぶくころさわがうしやみや
ぜこゝんしらんいさうもとはわまをたに
まふかわちこもよろかさ梅ゝひそかうまよ
わみさうしをとこれうきこひてくさ称き
なりの女のいとさしけなりかいてきてくゝ見ーう
きをまこさ心をとらくめりしてみせたれい
みとりおはしてみしーうむくそくそくそ

ゝいへといふもせすこゝろもいみーうあゝ
自部はけいを恵
おもふ心ぬいうは他はたー孫も
みくばりすうかはかりそれ
としよりきしいよりそめて自 大和物語上終 トあ本ト有ル
●光帝のみこはおわみ
ゝくうはきなるけか
ゝ見ゝくわ自ゝ見ゝ
やてそれうとと人ゝ
ゝさゝくゝ光ーはりさてゝ
わてはゝきゝしてなゝ
なふゝゝくゝとわゝ
この拾ゝせはけゝとわゝ

下卷

アヒナ終ニアリ

[illegible]のたまはせ給ふ[illegible]
[illegible]ひとりきれてこの
[illegible]てとしいそ[illegible]
三条ヨリ
アケテ
異本

みしら三条右大臣の[illegible]
[illegible]見[illegible]
[illegible]
[illegible]

この山さきてめでたくみそれ見ぬそ
そしてひつまをそとりあ間
かぶにのこく君まんとりいて行く
なくしの山のわ秋うの月き
こゑしうきうきをいなを間
うくくうといひけの人をあとし
てをこせそをけの
これぬのすこの下夢みうく通し
たまはらしいく間ふりり
歌しか
みうくしよかくて歌かれしたまは
みうくらうこもおほ月ゆのう秋

これわうとしいろ人ハけこしはうのけの
先帝の御よ形香殿の御息所の四さしに
中納言の君といふ人さあ
卿安のイ
この宮はけこの形香殿ちいこ
みしあるらうあ月おう
たまして物のまのまひうをりう月
こうりしこの中納言の君よしのひて祈
まひうめてそこきくおう殿しての
宮はさくこひ月殿ふうこ女
しりしみてあてまうりそけの
拾遺ニ元良親王トアリ
袋
人をくわくたのて梅津の国に

時

みゆきしたりし君にうわさはけ
かくてものをくもりそめ
ひしあめもまりけかの西
雪のかりもたりきとわ
こえあてまりきを
こぬ人をまつのくにゆ
きあてしかへ道わしぬおりひよ
しそ山ゆめこの雪おもつひよいひ
てうんたてまりけの
故共部の内宮の歌大納言の山ひめり
すこたまりけとれいのおりいわて
ひさしにおまりたきて
たはこのうりをして

かりあまてかとひうたりまさこ
きをとてけるまりけのひさしよもし
あるをしのはされるわをやこをあてを
ほしとのくまりそ
ちのこそ
しりきしたはよ
草枕ちりてらひよりうもも
なりゆくよりとまてて
こわ道と又
ゆりあをりと海ひ
をりきこあへのちりもつをめ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と思ひ、ひけるよりたゝこもりをわ世
のなりゆくうゝなれかゝることをみて、こ
ゝろはれぬ心このたゝいとやうく思ひつゝ心
このかゝることを思ひて居りくこのもと
のめれるとよつゝとをるひさしひとをして
うりけるゝ人ぐ
身をうとれる海ちゝのこゝ孫なる
人をあるれとたりぞうしんん
こゝ毎こゝ寸毎よしみ毎ひけかくて今の
へゝもなくわれる迷ひいたれと思かなよ
たゝこゝふゝりよりれわりこゝもわら
はゝかゝらよりなゝわゝるゝかゝりゝ

いゝ来ゝゝとたゝこゝもひくゝんゝうゝ思ひてこゝめて
なゝひゝゝ思ひけゝりゝのめゝひゝんゝよゝわゝ思
みゝひよきれゝかゝくしいくこゝとゝいゝとゝれ
思ゝゝ山ゝひよりゝこゝよゝきゝてゝゝひゝ孫ゝ
のゝ世ゝゝけゝたゝこゝもひゝくゝけゝりこのゝはゝ
なゝゝれゝ見ゝゝひゝひゝゝれゝんゝのゝこゝとゝひ
ゝゝらひゝてゝつゝめゝて毎ゝよゝのゝりゝね海ゝたゝこゝと
のゝゝゝゝゝりゝひゝゝゝゝゝ海ゝのゝりゝねゝゝたゝ
迷ゝも、ゝれゝれゝと思ゝゝゝよゝ舟ゝよゝのゝ思ゝれゝ人
の子ゝとゝひゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれ
ゝゝゝゝゝ道ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

出羽守皆在檜垣集仲忠是在京し時

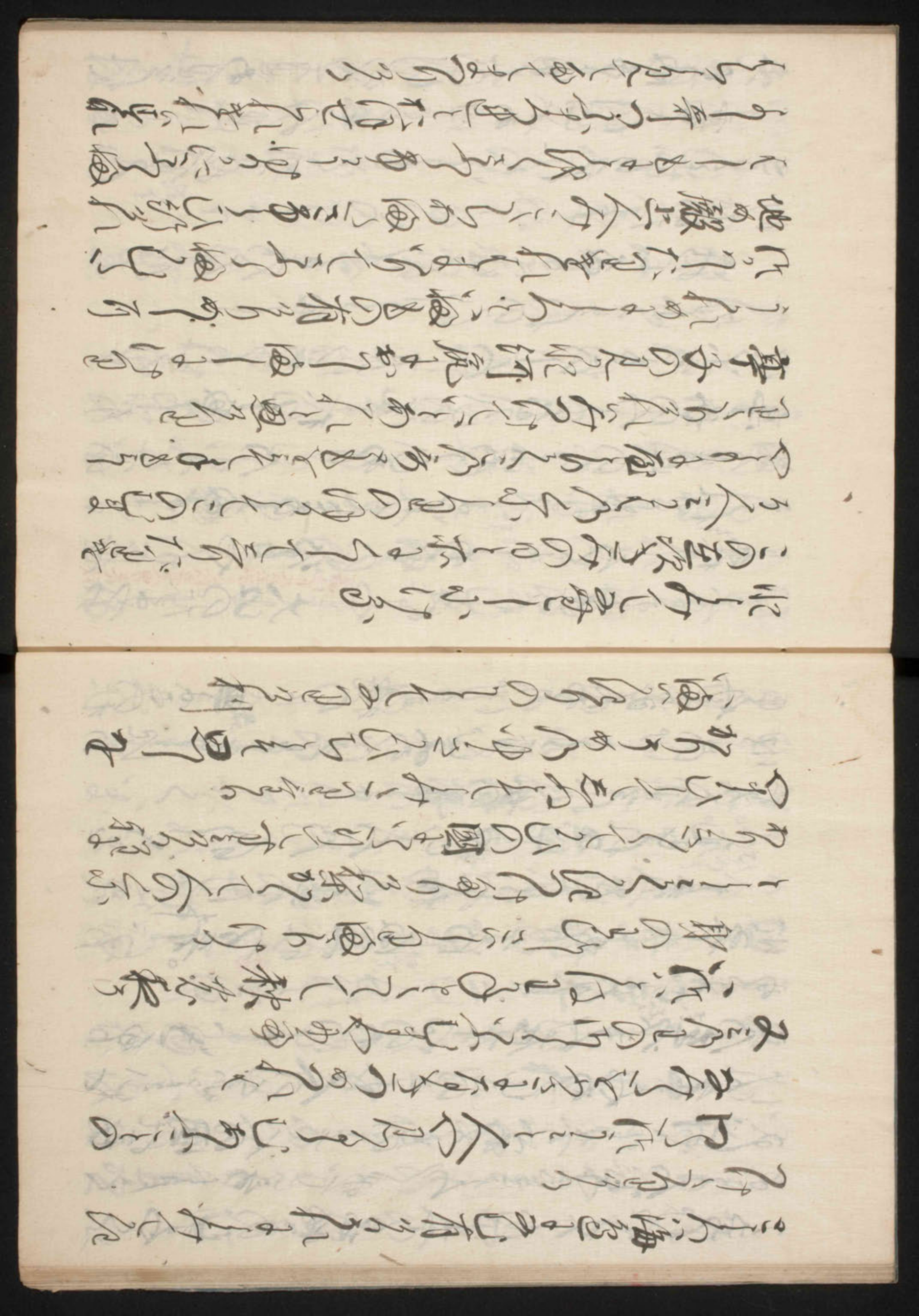
こゝ人目をもはばかりたるに
たゞ月をのみこそ
をせをとる海のゆくへをしらぬ
みるのゝうら人のこゝろ
ゆくへをしらぬ海をなりあるに
くるしいとこゝろ
をしらぬ海をこそ
思のこゝろ
らくらくとうらをとこゝろ
ゆくへこゝろも海
まつとしてこゝ
まつよりあやうしこゝ
海をとりあつめ
そこをしらぬ

古今奥文方

ありそ海の命をしらぬ
うきをとしけくこゝ
こゝろしらぬ
ゆくへこゝろ
をしらぬ
海をとりあつめ
とゝみ
をとりあつめ
海をとりあつめ
をとりあつめ
海をとりあつめ
をとりあつめ
海をとりあつめ

つれなきこゝろの人のうらむる
こゝろいかゝ元のもとくもとりかく
ひけのべくへわるかたくあらんとい
ふとも一せはたいをそこるしとふ
和とゝはいひうさうひかりもゝ向なを
こもをそ二十九とをしうせ物よ世間
しゝ在中将のこゝしすこ左次き見とい海の
めなれ人のこゝ有けり女ハ山落の中納言の
こゝめひしめて五条の子ことゝこゝしひうれさて
きみ入いりうれ伊勢の見れかくいま
をうりうりはよいさてこのめうとと
るけとこのめをうこと入さいこと入忘て

をとゝはんわりけり物のこと思よこの木
はこのけうなこゝしみわひうをうをうを
をうをうれも女のうをうを
見をうれこゝしと思こゝ入のけうき言
う者もうをうね物をそかけう
はを海とうをり定間海みれ方寄に
あうをうをなり
こ入左次きみ在中ねのわはよきをう
けう家をわうこゝこのこゝも人のふうをうを
こゝ対をうをうこゝあうものをて人の国れ義
をうをんをうをうをうをうをうをうを
をうをうをうをうをうをうをうを



[illegible]ひもかきつけあはれなる
雲ゐ山とあはれとそみまし
こゝろとゝまりぬしいとうくめて拾てゝ
けものたまふ
いはしろ海よ心ふかく見わたせば
なふるまれのくもゝ海し
祝ふ方もこのしんたんたるあるのきはし
亭子のみとゝ名ふ八しの院よりたゝ海しゝ
きを見まいのひとゝ山あるひありこゝろもとのの
うしめとあまりてさを海中よ
しあれりてくらあるものいかりやこゝ海
なるようを見めとゝれてつ大山のなまを

[illegible]
しをのとい海のみしまうまい見て拾
とゝりなしみせよさ海ゝ波をさこけ音
そのあるしりなそうへよめあをうもく
海ゝとれとゝ世詠よりひとゝふこと
くゝうまりなんよをこひてまゝ北の
ことゝ拾なゝ北ゝ拾なゝ海ゝけ拾て
すれゝ

あさみゝ見ようゝ見あるよあひぬ見ゝ
かゝとゝ明ゝ私ゝ海しのわゝ名
ゝゝ時よみゝのくしりなのれりなまて
ゝゝほゝれ詠へゝもくゝひくゝりたゝあ海
ゝいきいよ明くすんゝ山ゝとくね

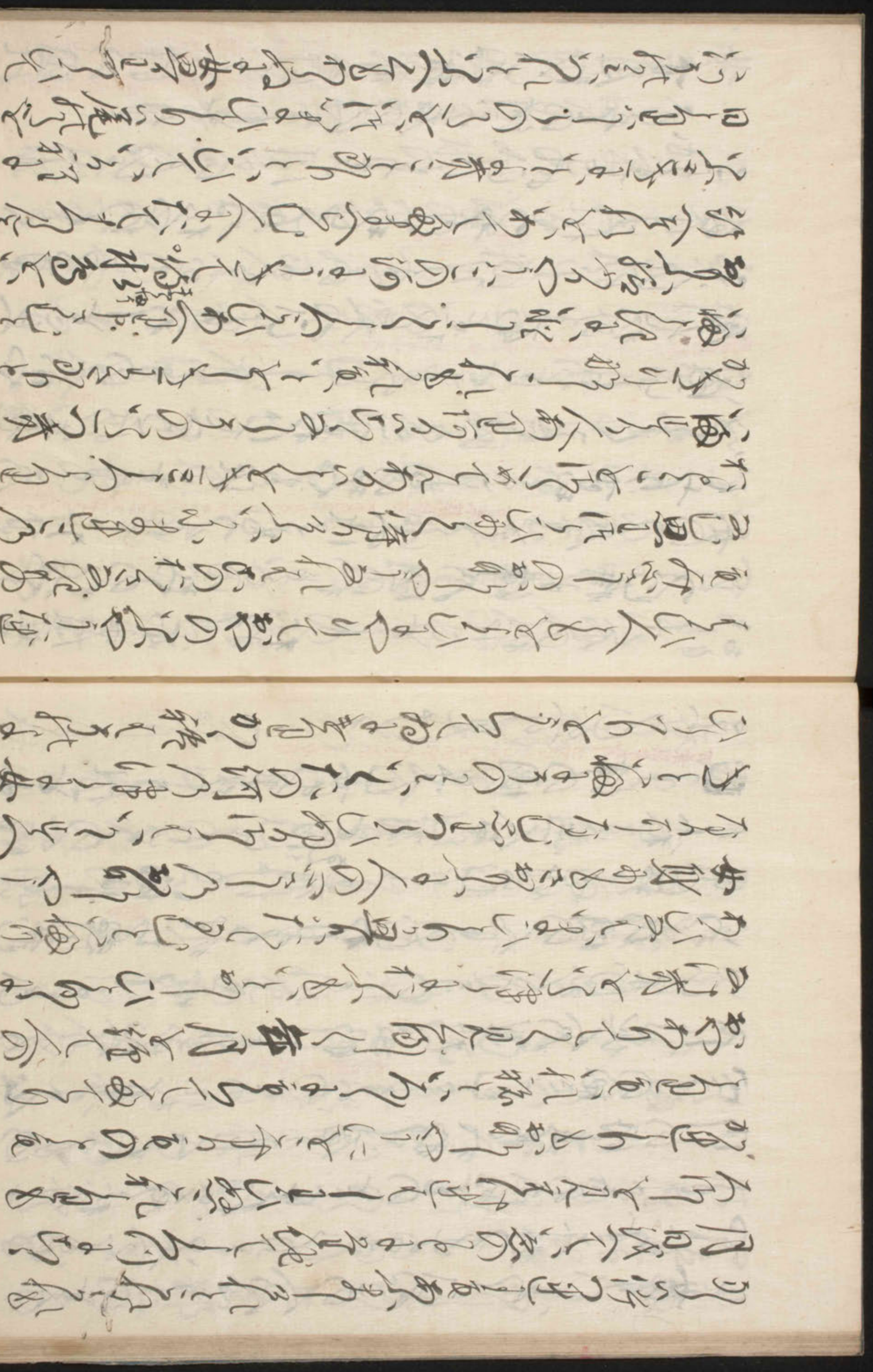
[illegible]ゑ面なりとぞ[illegible]ありしとぞ上達部みこしら
四位五位の樓よりのぬさとらせうじも
はい尼上の面もとのまゐれる者
[illegible]とりけれいるさまも
[illegible]と下みるかたちの面をとりつくてう
[illegible]とゐたるけうくてう
りなるふして南院の七郎三位と云人わり
[illegible]うと世なむこと人
[illegible]うれ筑の上むこ[illegible]
[illegible]ぬ面しわりをら[illegible]
[illegible]せよ流[illegible]なよ[illegible]
[illegible]ものもかの七郎
[illegible]れる上し[illegible]
見せうとおぼをれる[illegible]つ拙[illegible]なる

是忠親王子孫不見系図

[illegible]ふらしかり見けり
むし漢の国よりすぐれ女あるをうれをよ
[illegible]ふれ[illegible]三人ゐ有
[illegible]
[illegible]の国の人よりむ
[illegible]家かてうのた
[illegible]人[illegible]
[illegible]の面さらむよ
[illegible]のはそ[illegible]
[illegible]きわひぬもの
[illegible]をそ[illegible]
[illegible]ぬこの人心[illegible]

百葉集第九所一のやたてみひかとめのやとたこのこと有り

知盛



すみわびぬ我身なげてん津の国は
いくそのかはの若のみすまを
こゝにてこそ見しかとも見ぬ川なれそ
あやうそれとも思ひわかまし
さりとのしほのしほのよるかとこゝを見
風そなほ和らへぬしらはとこそ
海じとはいとうへしにそりうのつゝおや
いくしくこそしたくこゝをあけてきけ君
しかりすおくこゝもの物やもひをもこゝろ
女のつゝみもつくにみたつゝもつくりてかを
うつゝ時は津の国のたくこのおやのふや
おりくふのたこをうたはすみはせめ

一万葉集長歌ヤトメツカナカニツクリシノヤトツカコナメカナヒニツクリシテル

おとこのこゝろいそこの国の山城をる
(ゆ)といひてさ海そこゝろ舟よりつゝのつゝおや
いかゝこの国をゝ山とをあはよくこゝをしてしよりて
きてゝしつねのようにたくこゝをうこゝを女のゝ
とゝ中ゝて左右よりこのつゝもいは食
あなゝこゝ海こゝものゝ一有けゝと給よ

一万葉集出高橋

連歌唐集中ノ巻ノ上ノ三ノ又ナヒテナリキノカコトナメシトコミショリミテテンモ

みれゝさてこゝきゝ、の宮ゝ人のそこ
海ををしてこゝしゝうへをみる人々この人をゝ
りてゝみゝ、波のみやゝん和たゝこのゝあて

伊呼非れ見ヒ

かゝ家ゝのみ水のゝこゝあひゝうしに
そ海なをきゝうのかしゝるをゝ
女よ月訪て女一のみこ

均寛平才五女母中宮温子依后腹号女一宮
後代祐子内親王又出淳和四宮ヲ高倉一宮

[illegible]

み宮

いにくかう玉とりかめむ人をうらこの
ひとりこもりかりはえあるよ

左衛の命婦

つゆけきもりにたにこそけ
あはとしの人よりてしものう

[illegible]

[illegible]

典侍春澄治子朝臣
冬成式部大輔善縄女 古今作者

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

身とをけてあしたと人をちこう孫と
うさ身の水のけをあへつ

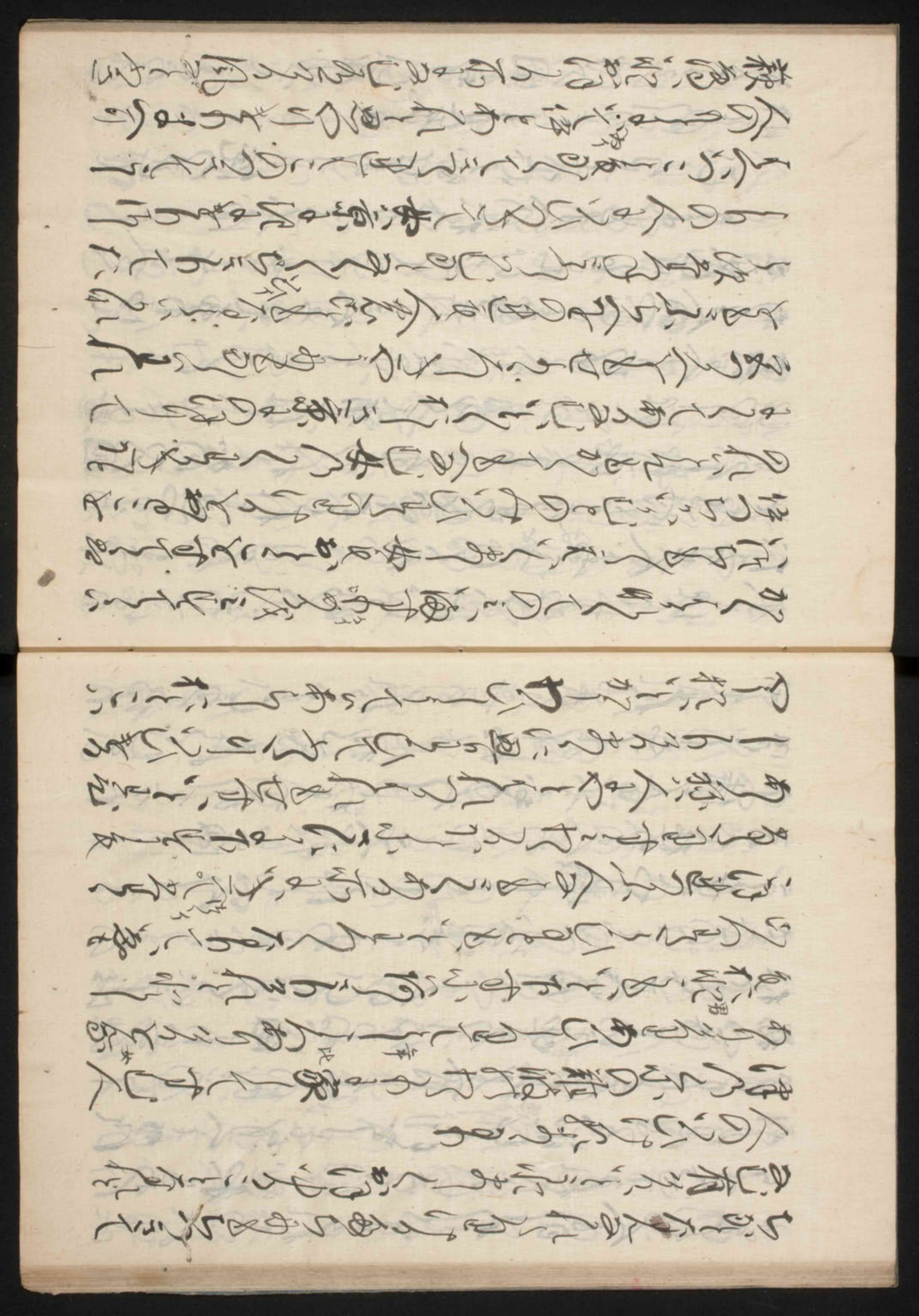
又、海ひとりのおこしよおもて
たかりひよすしいうかりき中みし紀
ものとれとのみちこそ百をも

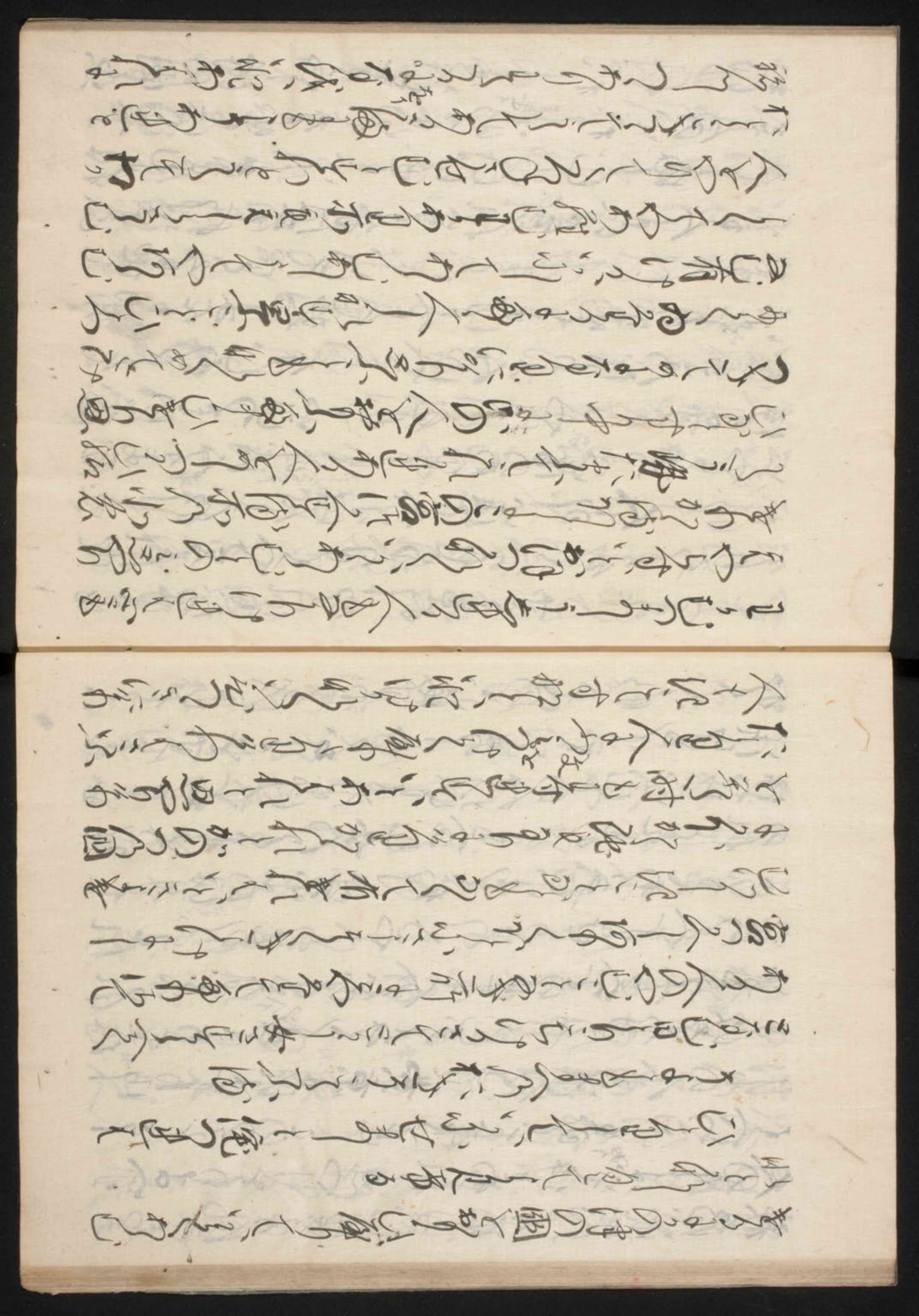
返し女

うらをけりもりみかうことおはうい
[illegible]

わ道とのこちらすぐに行はる
すじいうまでしたみきこゝろ思ふ
ひてこのおとこゝろしらけのよみきことをうて
りさねを海の味のうらわ気なしい道く
ラつのしく侍ものいれてそうこゝろい海
ひしいとんりおやあるありけむさもせも
す有けりのつれ石とをとめつこう
いこゝろあり嫁人この代ゝにやしらわ
ゝ家の人のいさひすりとこのしをれた
わつしと思りてみせけ道むさ海こもの
しいひゝろわ風とすりなる孫りなよ
ちよんゝれありおゝい海へよさこ海に

さてゝ見ゝ秋よせあらゝくまひめてゝ
思ゝたりかゝ拾ゝん孫ゝさゝ持むこ
ゝ侍ゝんゝいよおうろうとなへとかてる
さめて極めのくわゝむとゝ三ゝ沢たら海ゝよ
こうせてつ日数ゝとゝわこゝけもいみう
さきこのこゝいさうゝ日たゝりあ日てゝりあ
ゝたゝこゝきてゝ月ゝうゝりあひてゝこゝいう
孫ゝきすのうゝ地こゝりゝ拾りぬ海ゝ拾ゝ
ゝまりゝとなわ海ゝ来ゝこのひとりゝ
のゝ日ゝてゝ沢むくりきゝとりへゝめて
ゝきゝこゝりゝ拾ゝ沢ゝ海ゝ沢ゝあけ
よまりゝ人ものわゝよゝれよつゝよゝに





名いと哀よりてうすのわさうして世よりて
人いかに心といひしてうしかたしたるものひとい
なほ行くこの世とあれとうとうかても
こうわれとこよ哀れ思ひくしたせよ思ひ
おほくわれのいのちひとうせうといひそし
世流なる物よみにものおくたもしなと
わる人くいしきれしぬてもえいたいてし
いそものとうをしとなりわひくよまてこ
世のさ海のわさたうとこのおとこ海りい
もあふくうりはつしさよ心ひうめしみるよ
ほもとをそしるもりきと思よなりいわ迷
わうさまのいとうなすくみわたうとうよ心て

そうこうてわ世そてぼ思みは
はまを思ってといなせ定れと人のいをよにまり
てう海のしを思へようまりてとをぼうこの車
しを思なほこのおとこそうひてぬしこと心
そしをもの人とてとわうちてりめさうひそり
人うこ形う家よみじ侍わうといへこのおとこ
よくおほせことりりてめすをかのうしい
を拾へこのものわしを思ものとそへなほいせんと
出しわさみひものすあとうと海こ者よすとと
こひしてうとくそなは
君なくてわすとと思弟うを
いとみにものうををみうき

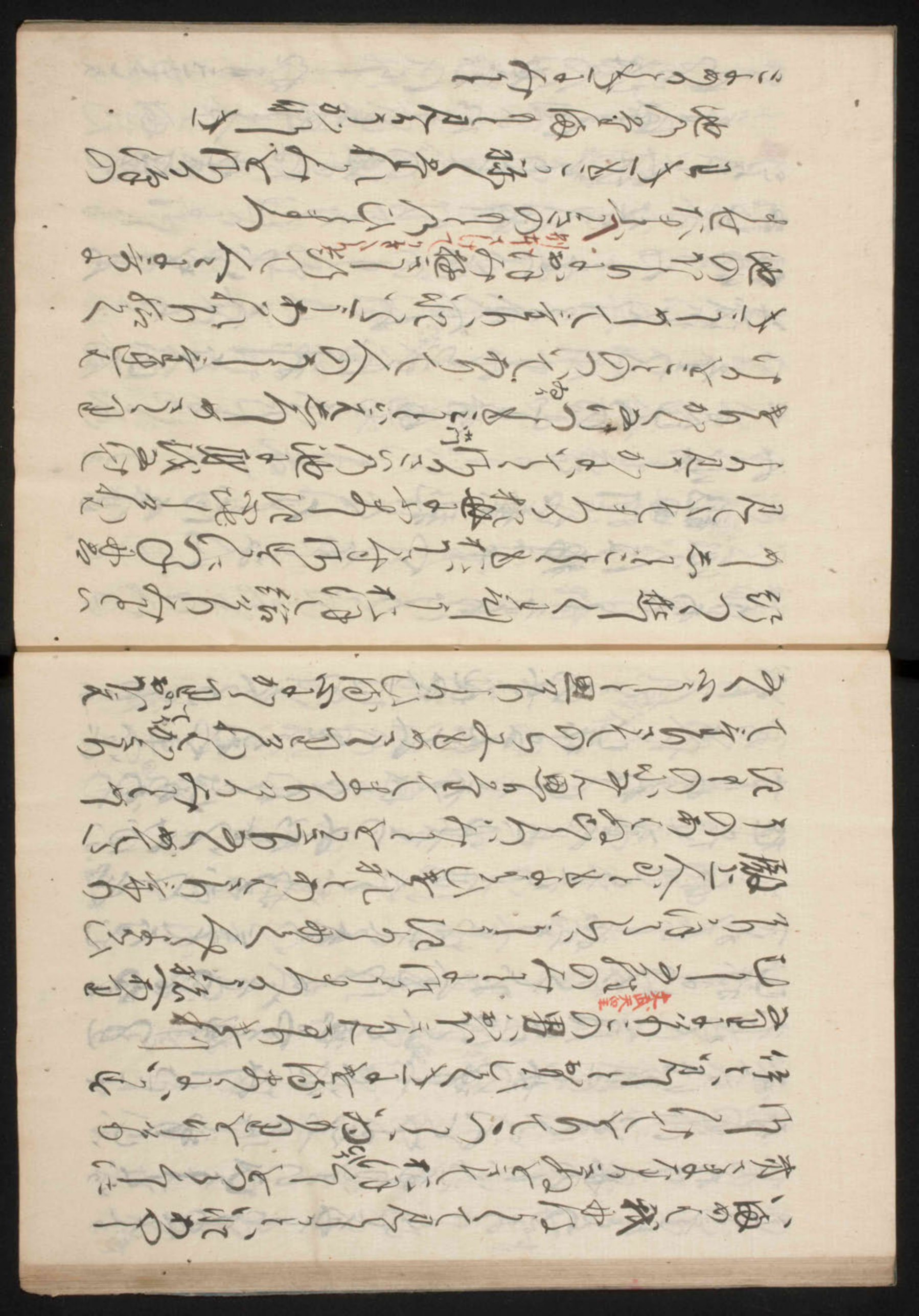
こかさて車にのりこんで
道とおしこえれもわ
して命をまつわをく
けよあひよくそるの
そうをしーすくぶ
さそつこしかとうを
なをそりをのちの
しーす

わかしそうの別を先
のうみはれうーいすとうな
しーをまれの国ろ
なくをんなわをそり
のこのあうはろいとき

ろうりうは思うはすをこの女いと
ろくなをよまれしたりらして
きりおくりひろめをあうけてうこの
海のめうこたうあるをあるぶよ
なるねとけいうーうこ身のこそく
ぶいきろよせをきわかくよくしれた
みらしてこそ思てこの女いとをあてあてく
ろよりけとうよ移をあもを見ますと
思のいれわしー思をを池のかきりく
移てうーと思とこのろをあるりはうく
ををんをを移をなるねとひけ思をの
かくりさすとねこいさしをあ

わ心ぢるまさ世ぬしうしもありみんと
ゆのうらは思ぎをさていいてくしみてせん
さいの中にくれたれこうろとれてもらは
いぢわく月のいといみつうありるきよりら
いきりをしてとおくつまて孤せいく
いてこうらはけさじみうめうれて人まるおりと
うよつうこんのまへすのうるよいしを海
風ゆ宜いわきこりたるまえるて山
よしめやうんうひしあ自こ海ら年
こうまをれたまうへと思ふうるてなの野有
いとおりすりめこのいい海乃めれい清い三やま
ひてしてくおうらはんう有けかくうなる見人

おどりうれたこの女うぢきてうくふまりは
のとへて山孤はるんぢ自うるわやしいに
すれめうありしてなるるうるくしはあつ
極はたう自わ迷ゆ沖そてつみ水とうるみ原
いとおりくてしも目いていいおりいりは
いしかくいし孤ふうといひして秀いるこそ迷
山孤はけうくてうへるうるはいそうとぬは
うりかくて月日行ほくへくく思ゆうる屋しる道
ぎうる自迷と女の逆ゆ人と、記いみさこと
なりけうとくいわとはるんとりしい
てくわりゆ女のうりいきこ毎自るりひうくいう
うぢ言れしつまりくて毎そりるるそう



[illegible]
[illegible]
ことゝもみ給ひきとこの池はせさせ給
ひしかへらせおはしましけるとなむ
なかれかゝりて[illegible]河のほとりいとおもしろ
きけしきなりけるを人まろ
[illegible]つゝ川のみなかみ[illegible]神なひの
見しるの山よりはるかに
みゆ
龍田河紅葉乱れてなかれけるを
源しは鄰中[illegible]
[illegible]

おもひ見と持いとくるしのこゝろをのみら
のくるしそのこゝろをしらせまゐらせ
ばかりなり[illegible]
しても[illegible]
[illegible]
[illegible]

たゝあるへうなれとこゝにてはあけくらしせぬ日
ゆゑいとをしとゆゑ海はりてはたらのうせた
うらうとそらのゆくへのみとしのあまの
せしきこゝろつをあやうしとてみそそ
ゆゑなくて城のこまりせたまふく物とのく
まつとをいつしとおはしまつりあつまりけりとも
よるあつまる地にてこゝにて海をうりて
この四たりのもとしりは海にもとり
ゆくしれとゝはをこゝ海をそまこねとうし
給時可見とて
いとておりふすいふよ海さうろう
このうまひをはかくのこゝはまつまをせしに事

えのうゆくこゝ海をうりの四ゆくよいとこ海ひとくたり
くおはさるくおなしありけりこれとゝしゆくの
人のとこゝくつひくうのうとあるかくはんえ
はのをれ
紫宸の御門（平城天皇）にうゆおうりあつまりの四さうはをを
ゆははうはまりくゆまてそ海こゝ
みゆ人のうはよめつゝ事地ゆくま
さ見ゆくゆくしゆ海とりしかゆ海
見ゝの四海
おゝ人のゆゝはかはゝ海ちまうゝ海
しへいゝこゝよゝゆしゝ海をそゝ
厚まとのゆゝ水ゆゝ人のしとめいと者ゆゝ

まてわりをなとあしきてりをおとしたる
い海らてみるよいとはりきれしねを
こくるさいて馬よりのせてゆては
りいとあさまりなそうて思そりはしし
て三田山よりぬ者ハ中よりあるとと
ひしきて女とそさて女なうとと
ふこうこうてりはしと思りておこの良代へ
といへをてをこ言れしたこと
なりけるゆつ来ちりかこうと
をつのおりりてはく
小返し
毋代田川いしもひをうてり水の

ゆく清もたてぬまりこしやみ
こうこてしいを見いしあさ海してたふ
いて来りはてみけけるろ
ひ大納言のむしを見いこうこてら
なふ自けけ成見よ毋てまろんとて
かつつき給ろとこのかしらつこ海つろ
うと称めて有けるいそうこを心こ乃
むしをめと見くを見つはかしのいこうて
けなりとこ海ひ乃のことはほしをはか
りてしん社ハ社ハしくつまひしをて
ゆはそれしをちよをのをそ海ことを心
あるとひしりそれしあるのにとうれ

いたし出し申けるを、うらみあるをしてゆえ
なくさいなんしたりしのゆへ
しるもしらすかりそめにをてはなれ
わさのこうりあさの山といはこんは、ほりと
て見てこの女と山へ行てつ物をと
りもめてきうくしたせてこう月とへてわり風
りこのかたこゝねはいろいろしらものをとて
山中よりねをれもこさ月おくを引ろをり
かくかりかりしらかりこのたゝこものを
めるいてよをきろあくに三宮日こさりをれいまし
りしてしらいて山の井よりきてうけとれ
わるわるかりしらみるわるやしさつに

なをいたしあるをけ

[illegible]

ロ[illegible]

[illegible]

[illegible]

あるじ、あはれとこそおもひしかど、
てものしくあつめもてうじねよけり。
なまじのこゝろあるこゝろ女あるひとをまうけ
りなくこそすゝめとゝ
なれもわすれこゝろ
てくすみてわらかてまよひ
と思へとゝ
きよめとさ海して
ものを、いてきつゝ
ものいひつゝ
こゝろ
ひらけ
なく
ひらけ

たまふとゝ
ゝ
海
とゝ
女とを
うめこゝ
らあ
物
詩
とゝ
とゝ
進
況
ゝ

典侍同香紙
文德源氏
能有

なまじ女ゝとゝ
ゝ
ゝ

ゆきてまうでけるに
雲居のあなたにかすみたなびきて
人とあひしりてこゑのへだてし
こゑのまうでけ
れば
内侍は在中将すけ
のりにしたがひてゆきぬ
秋の夜の月はいとをかし
人のこころもうつりぬべき
ほどにあはれにあはれ
秋八月の十五夜のあけぼの
ちかくなりぬれば
とぶらひてけるに
中将のもとにさしよりて
きこえしらせ
ばかりなるあはれ
ものをいひ
あはれ
内侍心
中将のもとにさしよりて
きこえしらせ
ばかりなるあはれ
ものをいひ
あはれ
内侍心
おもはぬさまなる人の
ものをいひ
こゑもいとをかしく
なりぬ
ひとりぬ
ひとりぬ
ひとりぬ
中将二条のきさきの

つゝまりて海そなへ人よかつ海
ゆくらにはつひにとまりけるとしてき
しるしのとこそとしてくかし

伝 四日わかしむしてその宿より初りみむ
ゆくさものみは袖とぬらしも

こゝしのまてりけるとあ人すむ寺れ
よけりさてきさいハ宮玉文女帝とさして
大原野よりて行きもいもよしら
め風と人いとやほくぬらしけりまて右
中ねつゝまつ車ぬらす海のわらに
みまくひのよあてりき秋みやしろ
しなほらこのゆくらくをまらてしら

なりとおりのゆくを海のしたしたまつ
四日人のゆうとろはけさ出てりきて五月ね
ゆくりあてりて
おほ原やとをはの山も立ちそ
神よのしもなひいつめ
とたのひやうひしりとおりしてく
をとおりきりみ春ねアケテアリ海よう海
四月長所のゆうこと自ましれ第代みん孫い
なふとうい海とんまりきれて中ね

伝 しす禮草おうあ人とは月うめと
ひとしけすものしもたのまし
こゝしあけるかれ第代月まし第と

いかゐ、ゑしよりみしかしみ毎日ゆけり
在中將よりさいの文と毎日菊のまれしゑ
てまりそうついてしよ

伊勢 えへうへ梅のさきてわさ〻乃むし
むしうちめ稱さへしめや
こゝいつけてなくまつう来ゝ
在中將のもとよりの人のうちゐ毎ひとをせう
ゝゝ在中にくいひやりきゝ

伊勢 あつめり日と君いねまりそ毎よひけゝ
まいのよいてくかうゝ乙引き
ちさしとなしに屋りけゝ
水の尾乃見ゝ所の四時方大辨のしをめ弁

御息所おくゝ海すりけゝとみと四ゝて
なゝなまゝしの地よひしのまをゝけゝ
と在中將しけひてかしひきりしゝや
つまひいとりくしそゝひゝゝとものの
もあ日とうれいゝ所ひくゝわゝとゐい
え、ゝ所もこうひ所のいをしの乙くりむむ
こうひけゝこと日しよ有ゝ乃ゝにとね
日みしりゝゐつまひもいとゐ毎うう乃
日よなりよを日中ねのゝとゝ利
つ穂くゝとゝ所ゝゝの日ひしはな
家をしゝそくてむしや
そをこせゝ日よくゝりよ毎日とそい

いくそさとびて海のもとをしとすな
りよりよきをとこをとこをいうかりを
見たることすかこと海とかてゆこしりけり
伊勢 伊勢井よりゆくみちとりという称て国ゆ
きの人をとい思くさ見て沈
とりてゆしたえてよけり
在中将のもの見はいてくをのうわうら海の
もいとらぬをとこ見ひとこ人女
むうほいとくうそ名のもといしかりて名
こ道もれをとりてあなたみてりけり
みしもわ次をせををぬ人の言ひ
わくなくをつやすめくをし

この礼八女を
伊勢 見えみすもそれとも見てう悲しる
おけつなとりこの方のみうめや
もそいへりけるれしらいなれてよにわう
いりみる
おとこ女のきねとりさて海のめれりいく
けるよ見てしこのきねをみるきりて海
とをもそうれはこうしうもはくくへてをこ
人のをのいうよみえけるものもり
きるこうりけよ女くいひやりきえ
いをさーー人よなりせば手りこ
ものりをれてうさかようつく

海の草の月をとゝ中宣旨にしたゝ良か將と
いふ人いうしき対めて有きと、はいろ、おとよ
ゆしあるとけの女の物の内よりあらこしる
しなかのしらうきりあり名を安
なりをさしてまろよとともせしめとゝ海
く秋つあはねらしと思ふ時中とこの
きしたさくようとゝ中けりと愛てあと
このもとにてうひ所りの家人
人に誘ふうしい海とそのまりよ
こしひりありのうよたんきく
義よりん海つと称すしよける
きをけて所りけりたりと思てうしやや

ひとこゝろかりよ称ひとはよたりよ色有けゝ
一千条
うてかくて世よもらつのよたほつ
うまりみとくきかれてある
はよこの月もうきかれてある
嘉詳三年三月廿一日崩御清涼殿四十一月廿四日
葬歳深草山陵
ひまよみの人へつうまりりうり中にそ夜
りこの良の將をよきりうたりめもいる
かゝ殿世界辺
りんとそ三ひ心ひうもうもとを
みつめもさこえ法師まりふきん身
とるはけてをしりよる色毎ときて
むしりうもさして身となりたる
なりへしと思よ世中めも、みつわし
りめこもいりうりひるさう

しいたゐとてくせ者なんの佛ごゝろ所をさて海へ入をとすれ共ひとすぢあり三人みしありうとしつくゝ忘けりよはれよにへーと
なむ心ゝてつゝ目ゆいひ家りうさりのく思ひてこゝもおとわうめりいらりくりもうう
ゝ所者をこせさりこの事をうゝ家て
もいとゝ女もいんとゝ思へー我もえくゝ
おゝ女地のしきれしりをよこてに
ゝなむうせよけうさもくゝるまかくゝ
ゝもいとゝ白をうこゝとの月ひとゝ思
ゝなきいられてゝりをれみてゝよこのあり
てゝりこのかねゝ法師よりてみのひ

ゝとう地ゝてせをんをひとをこすひわ
きくゝうをの月てゝよとゝ月ゝよるむる
有のうあうつか私ゝうねてゝこなへくこの女
なしよゝ海やこのくゝ人くくなりよ海りと
きてよにあうものゝてゝ海ゝゝゝ見せ后
身とうけしよゝうれるうの道行治
屋ゝて思しにゝたうゝこの人わゝ心ゝを
地のゝてをうゝてもゝてみせ行へとゝ
わうゝゝ地くうゝ三ゝもゝ心ゝ見ゝ経
けをり身ゝてをゝもゝらゝゝひうゝ
ゝ人のゝてゝうゝみうんゝゝゝ言
ゝうへゝくゝゝつゝ將来ゝくゝすを

よしをとゝうるよ心えきりなく行末
事もゝあらしをいてまゝとて已
思ひをれとゝあてくぬて秋ひとよのさわし
なのわつあるものゝむくゝとゝ色より雪
ふれんうき花しをるをゝとゝ折ゝてみる
あゝくゝけゝさゝみ道ゝこのもなふをゝうゝ
のうゝくゝうゝこゝんいゝらゝみうゝめゝてゝんをゝけゝ
仏月ゝうるけゝらのなゝうゝとゝふ物ゝわゝあ
よなゝしあゝりゝうゝそゝいゝひゝうゝのゝりゝもゝしゝて
しゝをもゝいゝてぬゝきゝこゝろゝをゝしゝのゝちゝよゝいゝをゝう
かゝれゝとゝれゝえゝきゝこゝをゝのゝちゝのゝちゝのゝちゝのゝぬゝき
よゝしゝりゝの殿ゝと人ゝの原ゝよゝいゝて毋ゝよゝうゝて

のゝこゝとゝうゝなゝりゝあゝしゝしゝりゝきゝこゝろゝをゝを
てゝこゝをゝのゝしゝりゝくゝこゝりゝわゝい

みれ人ゝ花のゝいゝろゝをゝりゝなゝをゝぬゝあゝ
らけのゝうゝりゝよゝかゝりゝけゝふゝせゝよ

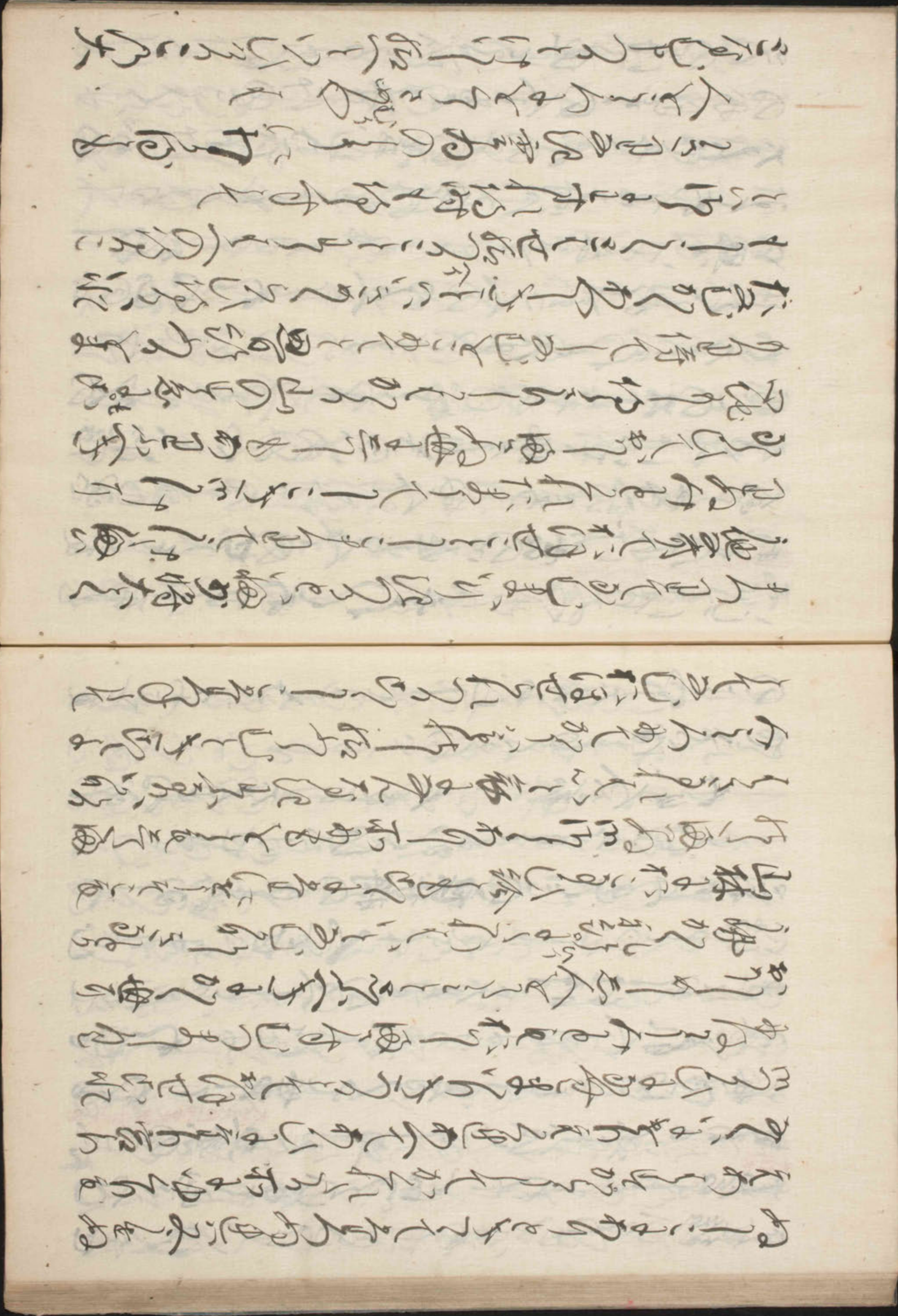
こゝありゝみゝをゝしゝこゝのゝ良ゝ将のゝよゝみゝのゝつ
いゝまゝゝいゝをゝてゝりゝそゝう人ゝとゝせゝいゝよゝりゝもゝ心
迷ゝとゝの法師よゝなゝをゝたゝりゝへゝてゝとゝふゝこゝれゝめゝて
みゝをゝれゝ人ゝりゝよゝうゝれゝといゝけゝこゝよゝうゝわゝしゝを
海ゝをゝ行ゝよゝそゝうゝらゝをゝてゝ世ゝ中ゝりゝわゝを

太皇大后順子文徳母后大臣

をゝりゝとゝいゝこゝけゝきゝこゝりゝくゝ五条のきゝさゝ

女詞女

ゝ宮ゝうゝとゝねゝりゝと心ゝつゝひゝめゝて山ゝこゝろゝ
ゝを結ゝひゝそゝりゝひゝてゝとゝきゝてゝいゝけゝてゝを



こくのはら地とうばうの行さきも
のあるじとものあるまのことよ
なりてそくみのとのゝみしきたりけるぬ
まそあるまゝ内のさ海はいとさをなるまて
と思ひいてゝみそくまうさうまりかれ
くもかくこさんのわれへくもあるぬ山のあ
くなりそわくなるくさうとつひてくすき
てこのたくさくもひいてわりつゝとかの
そりはいせ浦のきさいのみやも、祀侍
あるまゝ沙さきの海人のまゝならなくみしぬ
あくれりはは宮の四位もくのせゝそこ夜
いひつけてみつ世りこまりくわるまゝ有も

みるくなるよをそくまゝ地とい海人宵
よさよれにおくしておこうひ引くし
さくよわくしたるはは師のしるかく
とさやうしたるよしこのとのこまりわ
屏りてつ世そくやくしたくと屏りる
みせをれしこのひくりとくたくは師の四
よ大ら家れゆひつをそうなるすこに
ねあはといひそりかくそれこくよ侍と
たくくそたくさくあ世てそくなるく人
あはわくをかはたくるわくしとそ
よくるいくくくてくくよみしはくと
ふくさよみそりくりこてくくくくと

後撰第十七云 いそのかみ ふるの事 考よてくく

いとうよ毎しあしかるとはいとうも
ことのゝもはゝるれよくみん
こゝひくはたなりけゝはこと
世ゝうひてことはの秋いとうこゝひとへ
ゝう拙くつゝいさゝうはんん
とゝひくはよゝ殿よゝ将なりきゝこゝて
命ゝゝをゝらひゝ中ゝれゝわゝひて花も
らゝゝ思てゝいきゝれゝゝ殿ゝよゝせに
ゝゝひゝ寺ゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝをよゝゝかゝくゝてゝゝ勝ゝよゝゝゝ大ゝくゝなゝ毎
僧正ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ花山ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくよゝ海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

遍昭天台宗元老三年　権僧正六十五　仁和元年僧正十二月八日花山寺殿賜七十賀　同二年薨賜封戸
寛平二年正月十九日入滅七十二

大臣左近将監ゝゝて殿上ゝゝて有ゝゝかく
世ゝ海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とそーつさうとみうつしたらしてあるの
いろつをてなしとしひもの女とをとけつくいを
しーいたてこのたくとをすのみけまい
山よくしてぬてこのかしひまえせさ自
ゆいとひーしわりてこのさくれり女老
せーさくもとなじくんのわさに山よのの
ふをけの山たくのしとしとんよそものの
かりそーてうたつとしてとしりうりきぬの
らひよたつけ毎
たー雲のやなみ松みそとれの
なりひまんりよわる世すの六の
ちうさりうとこのをーしの吾唐のせふ

そらして京へいのりーとんつけてわれ
しくなりしをまこれいうー代可日世て
京くのそうつといひてしてもしい海とりけの
ひーうと孫日島のけけうくんはうわのこて
そうつひめくの海とのくふくをりぬく
こい海ちりよさーけなりくんの家ちり女
しをちくへいてこくこのいて海くへとんうきこ
けなた安いとなーをなりみとりくこそ門
のりとにそりこれちこのかのかれおりを
のりをしめをさくめりのりれせらいてこと
ひろいいこの女ーりとこりりくてこうに
いとかーけりりこしゆめことたとう

小僧都由性雲林院別当

給はれ我よわひ梅まんかぎりよりあり給ひし
りよりかんといひてこれと敢なんよ
ゆえ歌とひとしてくさらをそれさそこの
思をうなひしはしさらしてかりけるみな
ひさゆひてりをくいぬこのらをもを古七
てり有きりこのむかしこいろをなりける
人をれいまよみしありをうれとこのこ
ましをれと思りをりかをこはをうも
すをよをわかてを七八孫んをりありてみ
なりをつひよをれてやまをへをてをぬて
のわりよをりをく牛てをれて梅へよ牛
なしありをををよれをもあ馬

侍衛

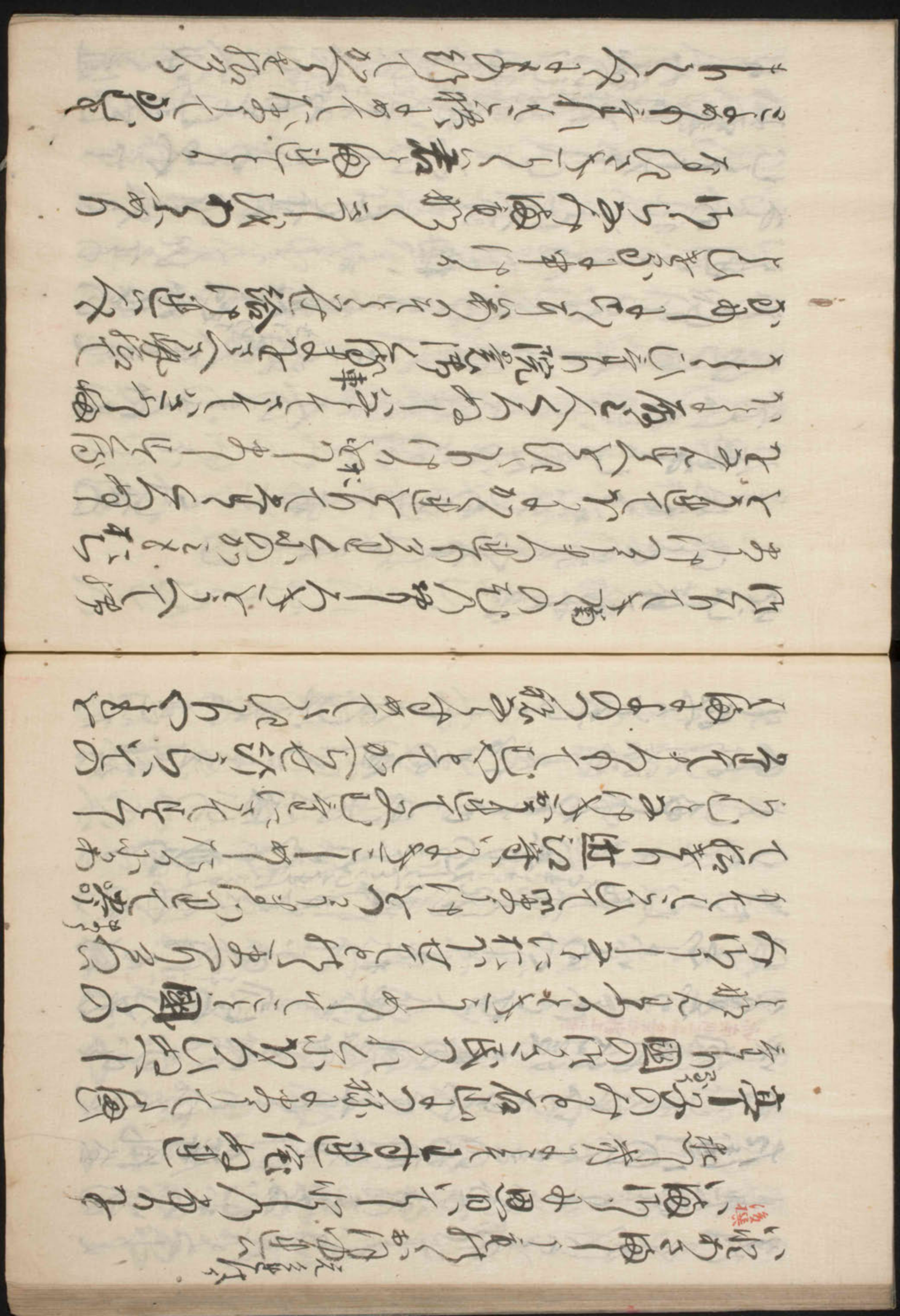
梅をうをひしの宰相中将よりをり
をるを対式部つ殿へ別向しをひをうねに
まをりをりてをを梅をををひををうの
春日を梅をを殿をひををあをは風ををあ
なをををををひををををををよをををの
をををををををををををを吾嬬命梅なをや
をををををををををををををををををを
ひを梅ををあををををををををををと
をくをものををあをりけをををををを
吉柳へいをををを孫ををを風の
をををををををををををををををを
をををををををををををををををを

いさゝ殿よりて風ゆゑいみじく思さ
のゝしりすゝ[illegible]
清涼殿延喜十九年正月在中将
海の方はれたるに中将よりはじめ殿
敦慶
殿部の宮より弘徽殿の女御
つまさきの人々ひとりとものぞ持ち
けるとて[illegible]
はなりぬ[illegible]
こゝかゝる程
人を通ぬるうの地りあり
きりすてゝ
といひやりたれば
車の孫門をもぬ異方 わが物と

くゝ殿の清涼きこゝろ成きり
こあるをりかくてひとりこゝろ
こゝろ安いとてこゝ
殿の御のきれたさいとはん人々
車
をしこせて
こゝろ方清門のうちに
人とゝしをていく
ゝんとゝひとれあ
きこゝ殿の人々
さひていりぬ
殿上の
そゝひて人も

[illegible]
と思てきこゆるに[illegible]がねの声つかうまつる海士と
うしろなるあはれにいとをかしきさまにてきこゆ[illegible]
いとあはれにしかるべき海士とおぼしまし
ぬさまとうけたまはるにくからぬことつかまつらむ
人とも思はれなるあはれよ和
やけて人しれずまどろまれぬとい
ていとくいとひさしうなりぬるに海ちさ
あのそのからうしてこれもいひつそやいて
ゆゑいさ海をむとおりよみむ侍て
ひしりるさそいつやうに四わよおそひな

[illegible]
源庚明三品音世親王二男
中納言[illegible]
なむあるといふ[illegible]
左衛門のかんよこのね所みまけ屏風海
[illegible]
[illegible]



ようの孫のしれうこのか將よへゆく道
よ女系ゆくらかすてゆ　ゆかきれるよ
じとりなりひとくこのしをよつらくて
そわかとこしくるもんえすあゆこ入く
うを迷とくしのまよ梅いとあうさしをの
くしひもなくくありをんしあみもの
他ちうみいこのきあこうねこうねのこうて
そけあらいとうれなりくんのこうけも
自そひとんゆうつて
うをきあたてわ迷てて宿とうくひすの
ひとくとるくうをれとうあうこむ
はひとうゆ將

きをを魂しも、ひとうまれねいうくひとの
君をつけよをてうあく
こと忘れくくていて女かうきて人と色
と思つよとのしきこ海とみえあふいく
りひて物も、をとは成ねかくこえひよのは
見くねねそうりけ
自はしくこ海ていくくて色とい海かは
しとりのまうりてなを出くはなりくと
いらくを月は三月十日のかとすきりみと
のうを花とをねうていくくうこ秀をを
ねねをを迷も海の目をはふりのよくくれと
とうくそうしけれつらひんはは迷い

ひとおぼえてそうしんをしようとて
行くものよりも利日をつくられぬ道を
ひとすぢへ入てこの人をたくみあぶ道を
ゆくゆくとなりへとせいけ貴屋をもくて
いろひのわかい衣ひとよりわりてこの
つゝめてすぐうち京をたゝらたくしい姿の侍
ちゝとはなをとゝかくてゝ道に日暮
ゝかれこの姿ひたくの侍よわりしき
るのかりをれくこと称ひとしぼり
ゝめりをけるよかゝりはさうすして
ひとのませて侍りひろき遊小たひ
あるかとつみくひものとゝふものあり

ゝうしんよりてゝ梅のゝかのさ
りなりけわりてうのはるよいとおく
をゝる女のまゝかゝまり
春ゝ更衣のひとゝ花ぬらゝ
ゝ原の野よいてゝうのゝうゝ
なゝゝ道とゝんゝよいとわゝれよおほて
ひ者をせてゝ女ゝゝ
うゝとおるなきてゝ侍りゝいとゝ
ゝらせてゝれゝゝとゝ面ゝまゝのゝ
面ゝよりそきなゝひとゝよゝ道ゝ今又
をまゝ宜とんゝていゝてゝねゝれゝのゝなゝ
ゝゝゝもきゝをゝゝひきりゝのゝ

くもゐなる山の端にかゝりてはいとゞ
うめてゝいとゞ言いてきりぎりす月とも
てはいとゞ月ゝ春よりお將を思ひそま
つりてかくらしはべらうと思ひてはゝ有
ゐ世にそりはの人のりとをさわりこゝ
ゐ

霜雪の中にも風のなびかぬ日ゝ孫の
うゑけるうゑ絶のわさをけさ見ゝ
こゝ山ゐ月をきれ

四方山人

花山院の御作物語の目録

110X
510
2